淨瑠璃雑考（三）

秋葉芳美

子供操狂言

子供操狂言、又は子供操芝居を、即、身振（首振り）狂言又は身振芝居と解する人もあるやうであるが、番附や役者評判記等に見えるそれは、廣義には子供役者の演ずる竹本劇（義太夫狂言）と解すべきである。尤も子供操狂言といつてゐる中に身振狂言を演じてゐるものもあるが。歌舞伎狂言と混合の顔見世番附（私藏の京都のもの）には「操歌舞妓狂言づくし」（寶暦）としたものもあり、歌舞伎で演ずる操狂言の意で、操狂言のみを「操歌舞伎狂言づくし」（寶暦）としたのもある。

役者評判記では、寛延二年十一月京都布袋屋座（座本水木吉三郎）所演の子供操狂言を附錄として評した「役者新詠合」（寛延三年正月刊）に「子供あやつり芝居評判」とあり、寶暦元年十一月大阪伊藤出羽掾芝居（座本石井飛驒掾）で「假名手本忠臣藏」（四ツ目上るり竹九ツ目上るり竹本今太夫本折太夫）・「丹生山田青海鯛」（三ノ口上るり竹本三代太夫三ノ詰上るり竹本猶太夫）・「大

塔宮曦鎧」（四ノ口上るり竹本三代太夫四ノ詰上るり竹本難波太夫）・（三味線鶴澤藤三郎鶴澤十三郎）の三切ものを演じた子供操狂言を附錄として評した「役者艶庭訓」（寶暦二年正月刊）にも「子供あやつり狂言」とある。この類の子供操芝居（又は狂言）役者藝品定、或は役者總目錄等は「役者眞壺餝」（寶暦七年正月刊）・「役者談合膝」（同九年正月刊）・「役者開帳場」（同年三月刊）・「役者段階子」（同十年正月刊）・「役者一向一心」（同十一年三月刊）・「役者年越草」（同十二年正月刊）・「役者手はじめ」（同年三月刊）等々、明和に亘つて附錄に見え、更に子供操芝居のみの藝品定が、出版されてゐる。その主なものに「子供藝評布袋醫」（寶暦六年五月刊）・「子供評判麥美喜名話」（寶暦七年正月刊）・「見立評判三舞臺」（同上）・「子供藝評役者五志喜目鏡」（同十一年十一月刊）・「平安遊冶戯場藝品定男娼競花」（明和元年二月刊）「京都寺社芝居子供操藝品定風流皷」（明和二年二月刊）・「子供操藝品定役者二ツ紋」（明和三年正月）・「京都寺社内芝居子供操藝品定三の春」（明和四年正月刊）・「京寺社内芝居子供操藝品定艶双六」（明和五年正月刊）等があり、これ等の書目は守隨憲治氏が「增訂役者評判記年表」（近世戯曲研究所收）を發表される時に加へておいたので既に御承知の方もあらうかと思ふ。それはとにかく「役者艶庭訓」に子供操狂言の評判を記して「殊の外繁昌にて、評判町中をなりわたる、よせ太皷も夜の内より打つ程の大當り」とある如く、明和に亘つての京阪に於ける盛況は評判記の記事や刊行等によつても窺知されるところであり、既に操人形は忘れられて子供操狂言が人氣の中心となつた觀がある。この情勢は操人形芝居の衰退に原因があつたと見られる。

大阪に於ける子供操芝居は竹田芝居あたりが始めたかと思はれるが、未だその年代を知る史料を見ない。京都では享保五年繩手宇治嘉太夫芝居（名代布袋屋梅之丞座本松本元五郎）で演じたのが古く、宮古路國太夫こと初代宮古路豐後掾及びその門弟の宮古路薗八、仲太夫等を始め、宮古路一派は主に子供芝居によつて語つたものが多く、今に傳はる正本の大半は（但し大歌舞伎上演以外）それ等の座に於いて語つたものと思はれる。その傳統を追ふてか、寶暦から寛政に及ぶ京都寺社内の子供操芝居の太夫は殆ど宮古路一派の獨占であつた。左にその例證を示さう。

○寶暦九年正月　四條道場寺内（名座代本）笠屋新太夫

「倭假名在原系圖」五段續

（子供役者・役割省略）

太夫（ワキ）	宮古路世代太夫	中村又四郎
	宮古路桝太夫	伊之助
太夫（ワキ）	宮古路播磨	尾上熊蔵
	宮古路民太夫	花柴虎蔵
		篠塚磯之助
		中村丑之助

太夫　宮古路綱太夫　嵐千勝
ワキ　宮古路十七太夫　花染熊藏
三味線　春富士大和（秋葉曰、辨藏の改名）　竹中百太郎　大和屋定助

○寶暦九年正月　因幡藥師寺内　名代辰己政吉

「けいせい阿古屋の松」五段續

切狂言「敵討巖流嶋」四段目　（右同）

太夫　宮古路和歌太夫　中村八尾藏
ワキ　宮古路卷太夫　篠塚五郎吉
三味線　岸村兵助　山下德次郎

太夫　宮古路縫太夫　篠塚善八
ワキ　宮古路佐賀太夫　市川民藏
三味線　岸村權九郎　佐野川滿吉

太夫　宮古路都太夫　佐渡島龜松
ワキ　宮古路采女太夫　尾鎌倉四郎三郎
三味線　豐澤平次郎　上菊松

○寶暦十一年正月　四條道場寺内　名代津川大吉

「伊勢海道錢掛松」三番續　（右同）

太夫　春富士出雲（秋葉曰、正傳の改名）　中村伊之助
ワキ　春富士陸奥太夫　山下德次郎
太夫　大和路播磨　尾上熊藏
ワキ　大和路幾久太夫　篠塚長之助
太夫　宮古路綱太夫　嵐花勝松藏
ワキ　宮古路十七太夫　大和山定助　上丑右衛門
三味線　春富士大和（秋葉曰、辨藏の改名）　竹中百太郎　大和屋定助

○寶暦十一年正月　寺町華堂寺内　名代藤村若伊

「春駒勢會我」五段續　（右同）

太夫　宮古路和泉太夫　萩野伊太郎
ワキ　宮古路三津太夫　鎌倉四郎三郎
三味線　岸澤伊三郎　佐野川萬吉

太夫　宮古路和國太夫　中村金彌
ワキ　宮古路崎太夫　中村房松
三味線　岸村兵藏　尾上松之助

太夫　大和路豐太夫　三保木吉三郎
ワキ　宮古路淺太夫　松本八三郎
三味線　岸村春次郎　嵐嘉吉

○寶暦十二年正月　錦天神社内　名代松本和泉

「戀女房染分手綱」十二段續　（右同）

太夫　宮古路國太夫（秋葉曰、世代太夫の改名）　萩野伊太郎
ワキ　宮古路春太夫　尾上熊藏
太夫　宮古路縫太夫　篠塚中村亀藏
ワキ　宮古路佐代太夫　嵐民藏
太夫　宮古路世代太夫（秋葉曰、卷太夫の改名）　松本八三郎
ワキ　宮古路百合太夫　佐野川富藏
三味線　岸村兵助（秋葉曰、權九郎の改名）　嵐駒吉
三味線　岸村兵庫　萩尾上野虎之助

次に少しく年代の下つたところの例證を示す。但、子供と中芝居の操狂言。

○天明八年十一月四條道場寺内（名代座本）伊勢松佐右衛門

「立身太平記」本能寺の段　小田居茶屋の段（同上）

「彦山權現誓助劍」墓所の段　毛谷村の段　中村門太郎

「淀屋橋喧嘩」和泉屋の段　しかま屋の段　山科政五郎　花染虎藏

太夫　春富士春太夫　宮古路佐賀太夫　宮古路歳太夫　宮古路粂太夫　宮古路糸岡齋　浅尾上喜代松　藤谷村亀藏　尾上辰藏　浅尾卯八郎　藤川重治郎

三味線　春竹辨吾　春竹岩八　春富士輪龍　澤村紋之助　中村萬太郎　三村市太郎　小野川伊勢松

○天明八年十一月　錦天神社内（名代座本）藤本正三

「祇園祭禮信仰記」二段目三段目　在所の段　八百屋の段

「おちよ半兵衛　宵庚申」

太夫　宮古路世里太夫　春富士和國太夫　春富士瀧岩太夫　春富士名尾太夫　宮薗文字太夫　浅尾仙之助　山下重菊　富澤八十郎　水木辰助　市川松藏　木谷光藏　富澤か之助　三村挿　谷金藏　水木吉三郎（同上）

三味線　春富士政吉　豊澤音五郎　春富士条藏　澤市熊次郎　山本萬吉

○天明八年十一月　門出八幡社内（名代座本）宇治嘉太夫

「古戰場鐘摺の松」二ノ口　二ノ切

「行平磯馴松」三ノ口　三ノ切

「敵討つゞれの錦」身賣の段　大安寺の段

太夫　宮古路仲太夫　宮古路出水太夫　宮古路君太夫　宮古路山崎太夫　嵐桐野谷嘉吉　小佐川富吉　姉川喜三郎　中村福藏　染川他人　玉川村太吉　藤川菊　嵐與惣吉　谷村國吉　山本興吉　中山金七　市川甚之助（同上）

三味線　春富士鬼政吉　市德三郎

宮古路による子供操狂言は京都特有のものであつたことに注目せられたい。

これ等の芝居や和泉式部芝居などで語られた正本の遺存も尠くないが、この寺社内子供操芝居も化政度には宮古路一派の義減と共にその跡を斷つて、身振芝居、又はチョボによる竹本劇の子供や中芝居となり、永續性の特色あるものを見なかつた。宮古路・宮薗・大和路・春富士の關係については「薗八節雜話」（「上方」第四十・四十一號所收）の中に述べたので、こゝには省略しておく。また寺社芝居の子供操藝品定

（評判記）の發行されたことは既記の如くである。

子供芝居・子供照葉芝居・見取狂言身振物眞似等は他日題を改めて說くであらう。

豐竹應律について

豐竹應律のことは濱松歌國の「南水漫遊一拾遺二の卷淨瑠璃作者略傳の條に「若太夫芝居主甚六と云」とあるので、その名を甚六といつたことが知られる。さすれば、歌舞伎作者の野田甚六（又は野田文六）、淨瑠璃作者の豐竹甚六等は同一人であらうと思ふ。いや同一人と斷じてよい。而して應律の號は普通、寶曆六年以後稱したものとされてゐるが、享保十四年正月（二日初日）、豐竹座に上場された「後三年奥州軍記」（作者並木宗助、安田蛙文）の正本の再版と見られる跋に左の如き記事と署名がある。

青葉は紅葉と照り露結んで爲霜の折から做戯場の破損するを工匠に命て修理するの暇、泉涙堺）に赴て和田後三年の兩曲を興行しけるに彼湊は愚父越前掾弱冠の砌より最負を給ふの御方多く弓も引かたの諺射たりや〳〵と當能く後三年の戰に大勝利を得たり、斯て難波の花とかんはしき御最負の方より飛札到來して內普請も成就ス早く故郷に歸りて奥州の軍記を始よと催促頻なりければ彼湊の御名殘も惜けれ共いなみかたくて望日故郷へ歸れは作文の諸手各々奇を釣、花をきそひ新作區々して歸一の論なく所詮冬枯の玩物となさんよりは長く幾春の花となすへしと最負を給ふ御方の任レ仰に偶人戯具を改 貶のおだ卷操返し物を御覽ニ入候 惟則温レ故知レ新の謂

千蕗莊應律　拜稿

かゑり花咲やこのはな後三年（原文のまゝ）

この記事は寶曆五年秋、豐竹座一連が堺へ赴き「後三年奥州軍記」を興行した記錄に符合するので、歸阪の豐竹座所演は同年十一月（一日初日）の興行であり、この跋もこの時版行された正本に附けられたものと見られる。これで應律の號を名乘つたのは寶曆四年頃からしく、千蕗莊も彼の別號であることが知られる。それで寶曆四年二月豐竹座初演の「相馬太郎孝文談」の作者連名にある豐竹千蕗も彼であり、また同年七月同座所演の「義經腰越狀」の作者千蕗莊主人も彼なのである。

彼は豐竹越前少掾の子でありながら、享保十八年頃から延享にかけて歌舞伎作者を勤めたのは、師弟關係によるのか、

修行のためか詳かでない。彼が野田甚六と名乗つた點から見ると、その師は野田碁文（野田五文・戸田吾文）であつたかと思はれる。私の見た番附では享保十八年十一月中村十藏座（名代松本名左衛門）の「重松金寶藏」や翌十二月の「女義經含狀」に中田嘉右衛門・安田蛙文と共に見えるのが古く、延享元年三月中村十藏座の「奥州信夫石」に並木宗輔・同榮輔・佐野川文三郎とその名を連ねてゐるなどが野田甚六としての終りに近いものと考へられる。恐らく延享二年父の退隱と共に豊竹座に據つたものであらう。然るに晩年、即ち天明四年十一月中の芝居（座本中村粂太郎）の「中儲乙子願見世（なかにまけたるもこのかはみせ）」に奈河永長堂（亀輔）・奈河七五三助の下に竹本三郎兵衛等と共に豊竹應律の名を連ねて、再び歌舞伎作者となつてをり、殊に竹本・豊竹座の支持者ともいふべき竹本三郎兵衛・豊竹應律が肩を並べて歌舞伎作者の地位にあることは感慨無量であり、こゝにも操人形芝居の衰退による重吹を見るのである。

宿無團七時雨傘の上演年代考

こゝにいふ「宿無團七時雨傘」は元祿十一年に初演された。それでなく、岩井風呂を脚色した「岩井風呂時雨傘」（別名題）を指すのである。まづこの作の通說となつた明和五年七月（十八日初日）大阪竹田芝居初演の據りどころを檢討してみる。通說の最も有力な根據は「並木正三一代咄」（天明五年刊）明和五年の條に「明和五子年春は京都中山文七より頼まれスケに登り、二のかはり、けいせい桃山錦を出し、秋は大坂へ下り竹田芝居にて無宿團七時雨傘、其頃の噂いわ井風呂の一夜づけ尤大入」とあるもので、この說によつて「大歌舞妓外題年鑑」角の卷明和五年の條にも「東竹田芝居にて七月十八日ヨリ、宿無團七時雨傘　岩井風呂一夜ニ附也　大入大當り〳〵　並木正三作」と記入したものかと思ふ。

然るに濱松歌國の「南水漫遊」拾遺五の卷頓阿雜事、明和四年の條に「同年夏道頓堀岩井風呂人殺し團七の茂兵衛とて今に毎々切狂言につとむ」とある。また「攝陽奇觀」明和五年の條に「七月島の内岩井風呂人殺し、事實は南水雜志ニ著ス」とあるが、同書も同じ著者歌國なので、一年間の相違ある齟齬をあへてしたとは考へられない。「攝陽奇觀」は歌國外一二人の加筆があると思はれる點から他の何人かの手によつて、この岩井風呂も後から加筆されたゝめの誤記かと思ふ。それはいづれにもせよ、明和四年閏九月（一日初日）京都四條北側芝居で、次の如き興行をした番附がある。

「けいせい十三錦」　法事の段、屋敷の段
「悪源太琵琶硯」　揚屋の段　義平館の段
「無宿團七時雨傘」　魚市の段　岩井風呂の段

岩井風呂の俳優配役は大阪竹田芝居と同様で、竹田宇八の團七の茂兵衛・中村松代の藝子とみ・竹田伊勢松の岩井風呂利助・中山瀧藏の平右衛門・竹田他藏の嵐三五郎・中村吉松の澤村國太郎・竹田時藏の千力市兵衛・竹田次郎市の數右衛門等。この興行は明和五年正月刊の「役者黨紫選」京の卷にも記載され、その口上に「京四條北側芝居へ大阪竹田一座罷上り、閏九月朔日より初りまして行(ふ)狂言は」とあり、前記の狂言を掲げてゐる。この事實によつて大阪の初演は明和四年と斷ずることが出來、岩井風呂の女郎富の殺害事件も同年の出來事であつたと思はれ、「頓阿雜事」の記事が正しく、「並木正三一代咄」の記事が誤記であることが知られるのである。

大阪初演の繪本番附は南木芳太郎氏が珍藏され、拙著「歌舞伎圖說」に收めておいたので詳しくはそれについて見られたい。但し興行年代は通說に從ひ、明和五年としておいたので、こゝに改めて訂正して明和四年とする。また圖說に記さなかつた各上演名題を補遺として次に揭げておく。

「機花壇に(からくりくわだん)咲分る品定　銘菊艶(なつけたりきくのはなやか)」

「南都十三鐘」「惡源太琵琶の硯」

「宿無團七時雨傘」(魚市の場・芝居前の場・岩井風呂の場・平右衛門内の場)

この時の作者は並木正三でなく、平右衛門の役名であるところから、これは福田龍松軒(高砂屋平右衛門・島の内宗右衛門町年寄・菓子屋商)の作ではないかと思はれるが、なほ有力な資料を得た上で決すべきものであらう。

附けていふ。伊原敏郎博士の「廻り舞臺を發明した並木正三」(歌舞伎研究第十四輯所收)の「宿無團七時雨傘」の條に「序にいふが、この時の竹田芝居は、角の芝居の一座が引越して來て興行をしたのである」と記されてゐるが、之は全く推定による誤りであつて、竹田芝居專屬の一座で演じられたことは前記の通りである。また東京音樂學校編「近世邦樂年表」義太夫之部、文化二年の條、宿無團七時雨傘の解說に「明和五年七月十五日より竹田芝居に於て、並木正三作にて「宿無團七時雨傘」を演じたり」。とあるのも通說によつて記したものである。

淨瑠璃作者の歌舞伎脚本

並木宗輔を始め、並木丈輔・安田蛙文・爲永千蝶等の淨瑠璃作者が歌舞伎作者となつて殘した著作は、殆どこれまで顧られなかつたやうであるが、これは先行の著書や傳記に妨げられた結果であらうと思ふ。淨瑠璃正本と歌舞伎脚本を比較研究し、淨瑠璃・歌舞伎の交流や接近を知る上には看過すべからざる重要課題であらねばならない。

上記の作者の外、文耕堂と松田和吉や長谷川千助が歌舞

伎作者もなし、伊藤流枝・豊田新助・藤川與八（富川與八郎藤田與八）・野田五文（戸田吾文）等に淨瑠璃の作があり、並木永輔・寺田兵藏・並木素平（素柳）・堺善平（榮善平・堺谷善平・坂井善平・境屋善平）・竹本三郎兵衛等が歌舞伎・淨瑠璃作者を兼ねた事などは他日に譲るが、淨瑠璃極盛期に於いて安田蛙文が全く歌舞伎作者に轉向して活躍し、また並木宗輔・丈輔等が歌舞伎作者としても才能を發揮して、後世に影響を與へた佳作などを擧げて、研究者の參考に供しておかう。

安田蛙文は享保十八年四月豐竹座の「鎌倉比事青砥錢」を單獨に書いたのを名殘として歌舞伎作者に轉じたらしく、同十八年十一月大阪中村十藏座の顔見世狂言「軍松金寶藏」を中田嘉右衛門・野田甚六と合作したのが歌舞伎の初作らしい。それより角・中・大西三座等を轉勤して聲名を馳せ、延享四年十一月京都中村松兵衛座に止つたが、寛延末には江戸に下つたらしく、京阪にはその名が見失はれた。而して寶暦二年七月江戸肥前座の淨瑠璃「上十五日男 下十五日女 太平記枕言」などを書いたが、その終りが明かでない。彼は時代物も世話物も能くし、淨瑠璃と歌舞伎との二方面に業績を殘したが、その功は淨瑠璃よりも、むしろ歌舞伎の方が大で、操淨瑠璃の歌舞伎化を圖つた一先驅者として、後進の作者に寄與したことが尠くないのである。左に歌舞伎の主なる著名な作を列擧する。

「女義經含狀」（享保十八年十二月中村十藏座・中田嘉右衛門・野田甚六との合作）
「本朝舞樂始（はじまり）」（享保十九年十一月岩井半四郎座・富川與八・松屋來助との合作）
「嶋原小蝶稚菁日」（享保二十年正月同座。合作同上 道行は戀の三ツ花がた—三人女夫）
「中山寺開帳」（享保二十一年正月中山新九郎座・佐渡島三郎左衛門・野田甚六との合作）
「お元龜松二枚綿草紙」（元文元年五月同座・合作同上）
「敵討巖柳嶋」（元文二年五月芳澤あやめ座・富川與八との合作）
「富士太鼓和合調」（元文三年十一月嵐三五郎座・小島立祐との合作）
「大伴黑主歌仙鑑」（元文三年十二月同座・合作同上）
「裾野達紋大磯通」（元文四年二月同座・合作同上）
「所ハ粟田口 刀ハ粟田口 藻屑三平血洗池（ちあらひのいけ）」（元文四年五月同座・合作同上）
「津國四貫嶋」（元文四年七月同座・合作同上）
「大磯妻 小磯娘 大藤內裾野八景」（元文五年三月佐野川花妻座・藤川文三郎との合作）
「天王子稚子舞臺」（元文五年八月同座・小島立祐との合作）

「矢車館富士」（元文五年十一月中村富十郎座・並木榮助・中田萬祐との合作）
「三浦彈正風俗鎧」（元文五年十二月同座・合作同上）
「女人堂二月櫻」（元文六年二月同座・合作同上）
「女非人敵討」（寛保元年五月同座・合作同上）
「闇艶武者枕軍談」（寛保元年七月同座・合作同上）
「先陣花兜初陣若緣萬國太平記」（寛保元年十一月佐渡島長五郎座・中田萬助との合作）
「八的勢會我」（寛保元年十二月同座・合作同上）
「降雲戔女逆髮姫君雷神不動北山櫻」（寛保二年五月同座・合作同上）
「星合榮景淸」（寛保二年七月同座・合作同上）
「土佐次郎妹脊鑑」（寛保二年八月同座・合作同上）
「東山殿旭扇」（寛保二年九月同座・合作同上）
「三國傳來石」（寛保二年十一月岩井半四郎座・並木宗輔との合作）
「雙娘山崎通」（寛保二年十二月同座・合作同上）
「艶書天草記硯」（寛保三年正月同座・合作同上）
「連理彼岸櫻」（寛保三年二月同座・合作同上）
「道中大井川喧嘩」（寛保三年五月同座・市山助五郎との合作）
「女鳴神振分會我」（寛保三年七月同座・）
「山崎與次兵衛今樣姿」（延享元年十一月嵐三十郎座・中田五八との合作）
「信田妻蘆屋男好色占問答」（延享二年正月同座・合作同上）
「敵討打出濱」（延享二年三月同座・合作同上）
「けいせい御伽婢子」（延享二年五月同座・合作同上・牡丹燈籠）
「血汐中山道連廻國攝州昆陽池」（延享二年七月同座・合作同上）
「世話仕立浪花男」（延享二年九月同座・合作同上）
「越後草紙吾妻繪本武道吉原筏」（延享三年正月同座・澤如平・安田蛙桂等との合作）
「庭訓往來滿足鑑」（延享四年十一月京都中村松兵衛座・中村五八・幾島小八・吾妻好二との合作）
「けいせい百夜血章」（延享五年正月同座・合作同上）
「けいせい廓船橋」（延享五年三月同座・合作同上）
「大和國文珠四郎山城國彌陀次郎遠州妹背淵」（延享五年七月同座・合作同上）

並木宗輔の作は前掲、安田蛙文との合作の外に「二引錦幔幕」（寛保三年十一月中村十蔵座・並木宗輔・野田甚六等との合作）・「大門口鎧襲」（寛保三年十二月同座・合作同上・）・「通小町　小野小町　奥州信夫石」（延享元年三月同座・合作同上）等、すべて十數種に止まるが、操りの構想を取入れたものが多い。そのうち「大門口鎧襲」は初代澤村宗十郎の當り役の一たる油賣庄九郎の初演で、二階のセリ上げ・鐘伏引上げ等々の機巧など操りのそれを應用した、宗輔が歌舞伎の代表作である。この作によつても操りと歌舞伎の交流が窺はれる。

並木丈輔の作は元文から延享に亘り、寛延に再び淨瑠璃作者に復す間に成つたものであるが、操・歌舞伎の交錯接近を圖つた點に於いて安田蛙文・並木宗輔・同永輔らと共に注目せらるべき作者の一人である。節風といふのは彼が別號との說もあるが、明確にすべき資料や文獻に接しない。どく主なる作を次に列擧する。

「梅櫻軍錦幔」（元文五年十一月中村十蔵座・松屋來助・野田甚六との合作）
「戀の角文字　振袖の往昔　敵討出口柳」（元文五年十二月同座・合作同上・道行はかつら男）
「金館萬代亀」（寛保元年十一月瀧川亀之江座・澤村文治等との合作）
「車街道怖心曲」（寛保二年正月同座・合作同上）
「山州小鍛冶社　江州手纏の里　紫式部大内文談」（寛保二年四月同座・合作同上）
「玉津嶋格氣傳授」（寛保二年七月同座・合作同上）
「浮洲農昔鏡」（寛保二年十一月姉川新四郎座・合作同上）
「大和國妹燈」（寛保二年十二月同座・合作同上・道行をしの思ひ羽）
「黑船一世一代男」（寛保三年正月同座・合作同上・道行は星月夜）
「津國金王櫻」（寛保三年二月同座・合作同上）
「形見噂浮名奥嶋」（寛保三年五月同座・合作同上・道行は奥羽鳥）
「ふたつ井戸双鏡」（寛保三年六月同座・合作同上）
「花かつらぎ日向景清」（寛保三年七月同座・合作同上）
「粧武者いろは合戰」（寛保三年九月同座・合作同上）
「式三番扇車」（寛保三年十一月姉川新四郎座・松屋來助との合作）
「敵討夕告鳥」（寛保三年十二月同座・合作同上）
「都三十三間堂當世姿柳女」（延享元年二月同座・合作同上）
「練由來濡髮に隱る二代の投頭巾　出入に讓る一代の草履下駄　男達後日鑑」（延享元年七月同座・同作同上）
「東曾我富士見郷」（延享元年十一月中村十蔵座・合作同上・道行は鄙の初戀）
「昔形吉岡染」（延享二年正月同座・合作同上・道行は蘆邊の田鶴）
「平等院螢合戰」（延享二年四月同座・合作同上）
「寅孱布袋嚢」（延享二年十一月京都中村粂太郎座・並木永輔等との合作）
「けいせい衣笠山」（延享三年正月同座・合作同上）